

調査の目的と方法

1 調査の目的

病院看護に携わる看護職員は、24時間体制の重労働であるため、労働負担が大きい事が指摘されている。

また近年、新たな医療機器の導入や、他職種の医療スタッフとの連携等により多様化、複雑化しており、身体的、精神的ストレスは、測りしれないものが有ると言われている。

そして、様々なストレスが原因で起こると言われている燃え尽き症候群と呼ばれる精神疲労や、労働過多による疲労徴候等の問題等は、看護職を続けて行く上で、真剣に考えて行かなければならない問題の1つである。

そこで今回、病院に勤務している看護職員の心身健康度や健康管理方法を把握し、どのような要因が、心身健康に影響を及ぼしているかを明らかにすると共に、その要因を検討し今後の施策作りのために役立てることを目的としている。

尚、今回の調査はこれまであまり調査されることのなかった精神病院に勤務している看護者と、総合病院に勤務している看護者との比較を行っている。平均年齢や業務内容の異なる両者との比較を通じて、看護職にとって心身健康とは何かということを読者一人一人考えていただきたい。

2 調査期間

昭和62年10月から11月末日まで。

尚、夜勤回数については、9月の状況について問うた。

3 調査方法

自記式の調査票と封筒を、施設管理者及び看護管理者に配布をお願いした。回答後、回答者自ら調査票を封筒に入れ、封をしたものを看護管理者に回収していただいた。

4 プリテスト

今回の調査のデザイン作りのために、看護職員に面接調査を行い、ストレスとその対処法、社会的支援状況、自己尊重度、意欲の減退をもたらす要因、私生活の満足度と健康状態を把握し、分析した後、枠組と項目を整理し、プリテスト（予備調査）の調査票を作成した。

更にその調査項目の妥当性や、尺度の信頼性を検討するため、因子分析、重回帰分析、相関分析を行い、そこで得られた結果を元に本調査の調査票を設計した。

5 調査対象

調査対象は、調査対象となった精神病院勤務看護職員と総合病院勤務看護職員（精神科を除く）全員である。

調査対象者数は、精神病院 9 施設785人，総合病院 2 施設142人，計927人。
精神病院有効回収率 78.5% (616名)，総合病院有効回収率 97.2% (138名)。
調査対象全体の回収率 89.8%，有効回収率 81.3% (754名)。

6 調査の担当

調査の配布，回収は，普及開発部調査研究室にて行った。

調査のデザイン，調査票の作成，コンピューター集計，分析，執筆は，藤田和夫が担当した。

また，調査のデザイン作りや調査実施，分析を行う際に，多くの方々にお世話になった。お礼申し上げたい。

特に，ニューヨーク精神医学研究所研究員（現在，文部省統計数理研究所，客員研究員として在日中）の Patricia Mcdonld-Scott 博士からは，他者依存性尺度，意欲の減退尺度，及びその文献の紹介や，多変量解析の手法を懇切丁寧に解説して頂いた。深く，お礼申し上げます。